

リバイバルの秘訣

2007. 1. 9(火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

列王記・第二 2章19節から22節

この町の人々がエリシャに言った。「あなたさまもご覧のとおり、この町は住むのには良いのですが、水が悪く、この土地は流産が多いのです。」すると、エリシャは言った。「新しい皿に塩を盛って、私のところに持って来なさい。」人々は彼のところにそれを持って来た。エリシャは水の源のところに行って、塩をそこに投げ込んで言った。「主はこう仰せられる。『わたしはこの水をいやした。ここからは、もう、死も流産も起こらない。』」こうして、水は良くなり、今日に至っている。エリシャが言ったことばのとおりである。

今日の題名は、『リバイバルの秘訣』、『信仰の復活の秘訣』です。イエス様を信じ救われた人々を見るとはっきり分かります。これは人間の手柄ではなく、聖霊の働きの結果であり、主の祝福、また恵みそのものだということです。「誠実な悔い改め」と、また「主のあわれみ」によって導かれ、受け入れられ、救われたのです。主が祝福されたということは、私たちの喜びのもと、また私たちの主に対する礼拝の根拠となっています。けれど主が祝福なさると、悪魔は与えられた祝福を奪い去ろうとします。ドイツには次のような話があります。“主がご自分の教会を建てると、悪魔も必ず似ているものを建てようとする”と。悪魔は決して眠っていません。私たちはそれをよく感じます。

信仰上の悩みをもった多くの人々が、せっぱつまって苦しんでいるのではないのでしょうか。みんな何か問題をかかえています。ある兄弟姉妹の心の中では、悪魔が勢力を振るっています。ある人は、「何を信じたのか分からなくなった」、「救いの確信もないし、救いの喜びもない」、「もう集会へは行かない。全部おしまいだ」と思い込んでしまっています。またある人は、「聖書は確かにすばらしい。けれど実際生活に当てはめることはできない」と言います。そして、集会から姿を消してしまう場合もあります。これは全部悪魔の仕業そのものです。そしてこれこそ、せっぱつまった状態に来ていることを物語っているのではないのでしょうか。

本当かどうか分かりませんが、ドイツにひとりの変わった人がいました。名前はオイゲン・シュピーゲル。(ドイツ人はみな知っている話ですが…) 確かに変わった男でした。彼はいつも遠くまで遠足に行きました。山道になると、大喜びで登りました。なぜなら、やがて谷が見渡せて下り道になるからです。彼は下り道になると、泣きながら歩いたのです。もうすぐ山道がやって来るのだと。(笑) このオイゲン・シュピーゲルから、私たちも何かを学び取ることができるでしょう。

悪魔は私たちを攻撃し、勢力を伸ばし、私たちは瀬戸ぎわまで来ているかもしれませんが、落胆するには及びません。「もうちょっと」で、主は新しく働いてくださるのです。オイゲン・シュピーゲルは一番急な山道に差し掛かったとき、もうすぐ下り道になるのだと言って、大喜びで登りました。夜更けになり、やがて間もなく朝がやって来ます。

私たちイエス様を信じる者が、自らを顧みて、自分たちはギリギリの線まで来ているということを悟ったとき、必ずリバイバルを受けます。リバイバルという言葉は英語ですが、日本語に直すと、「霊的覚醒」と言います。もっと簡単な言葉は、「信仰の復興」、「信仰の復活」ということです。

眠ってしまっている信じる者たちは、「リバイバル」つまり「信仰の復興」、「信仰の復活」を必要とします。すなわち、「主との生き生きとした交わり」によって新しくされ、新しく生かされることを必要とします。

では、新しく生かされる秘訣とはいったいどういうことなのでしょう。リバイバルの秘訣とはいったい何でしょう。

三つの点について、考えてみたいと思います。「イスラエルの民の経験したリバイバル」について考えながら、自分、また救われていない周りの人々のリバイバルについても考えましょう。

第一番目。エリコという町における絶望的状态。同時に自分の生活。また救われていない周りの人々について。

第二番目。エリコという町における難しい問題。同時に自分の生活。また救われていない周りの人々について。

第三番目。エリコという町におけるすばらしい逃れ道。同時に自分の生活。また救われていない周りの人々について。

一番目。絶望的状态

二番目。難しい問題

三番目。すばらしい逃れ道

です。

*第一番目。絶望的状态

まず、「エリコ」における考えられないほどの絶望的な状態について、見てみたいと思います。「エリコ」は、主なる神によって呪われた町でした。そしてこの「呪い」により、町の水がダメになってしまったのです。確かに、エリコの人々は懸命に働きました。けれど、すべてを失ったのです。実を結ばなかったのです。「死と空虚」がエリコの町を支配したのです。エリコの人々は、自分たちで計画し、あらゆる方法、方策、手段を試みましたが、失敗に終わってしまったのです。失敗の原因は、「主なる神の呪い」にありました。しかしそうではあってもこのことは、主の祝福だと聖書の中で何回も記されているのです。

もっともよく知られている箇所は、箴言の10章22節でしょう。ひと文章ですが、毎日覚えるべきではないでしょうか。

箴言 10章22節

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦勞は何もそれに加えない。

けれど自分の心の内側の状態は、考えもつかないほど絶望的な状態ではないでしょうか。聖書ははっきり言っています。すなわち「生まれながらの人の上に神の怒りがある」と。悔い改めたくない人は、たといい行ないに励んだとしても、或いはたとい犯罪者であったとしても、同じ主の呪いのもとにあります。なぜなら、そのような人と主は交わることができないからです。

ヨハネ伝3章、最後の36節です。次のように書かれています。初めは福音そのものです。さらにそれだけではありません。

ヨハネの福音書 3章36節

**御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見る
ことができなく、神の怒りがその上にとどまる。**

「御子に聞き従わない」。結局聞こうとしない、聞く耳を持っていない人のことです。そうだとするならば、永遠の滅びです。聖書ははっきり言っています。「生まれながらの人の上に神の怒りがとどまる」と。「悔い改めたくない人は、いくら努力しても、頑張っても、主は見向きもなさらない。あらゆる高ぶる者の上に神の呪いがある」と。

どのような宗教を信じていても、多くの聖書知識があっても、洗礼を受けたいわゆる教会員になっていても、そのような人々は、主なる神の呪いのもとにあります。自分自身を低くする者だけが、主の前に降参する者だけが救われ、呪いはその人から取り除かれます。頭を下げたくない人は、考えもつかないほど絶望的な状態にいるのです。けれどだれでも救われることができます。それだけでなく、だれも救われなければなりません。イエス様は人間ひとりひとりに対して関心を持っておられ、「救いたい！」と心から望んでおられるからです。

必要なことは二つです。

自分の高ぶり、またわがままをイエス様に告白し、そして自分のためにも流された血潮のために感謝するならば、必ず受け入れられ義と認められます。

多くの人々の悩みとは、次のようなものです。

「私はイエス様に出会った。救われ改心を経験した。けれど、今全部分からなくなってしまった。すべてはうわべだけの熱心に過ぎなかったのではないか。どうすれば良いのか全く分からない」。「実はほかの人を救う者になりたかったが、今は悪魔のとりこになってしまった」。そして「聖書をよく知る人になりたかったが、今はもうあまりみことばを読まない」。それだけではなく、「祈りの人になりたかったが、今は祈るにしても喜びがない」。「自分はイエス様に用いられるへりくだった人になりたいけれど、傲慢が根強く、心に罪

があり用いられることはない」。イエス様だけを見つめたかったけれど、今は周りの人を見、自分を見てねたみを起こし、傲慢になり、自己卑下に陥ってしまった」と。

これは自分では考えられないほど絶望的な状態です。すなわち自分の生活は、あたかも「エリコ」のようなものです。一生懸命に働き努力しますが、実を結ばない。また平和もなく、喜びもない。「私は何というみじめな人間なのだろう」と。この絶望的な状態にあるのは、エリコの町や自分の生活だけでなく、救われていない周りの多くの人々も同様です。

何と多くの人々は、金を得て、名誉を自分のものにしようという目的を持っていることでしょう。悪魔はこれらの事がらによって、数えきれないほど多くの人をしっかりと縛り付けてしまっています。多くの人々は、「呪いのもと」にあり、悪魔の奴隷となっています。この人々を「ひとりでも多く救いに導く」、これが私たちの使命であり、また務めです。

イエス様は言われました。

マタイの福音書 7章13節、14節

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからは行って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」

*第二番目。難しい問題

エリコの人々の、非常に難しい問題について考えたいと思います。

列王記・第二 2章19節から22節

この町の人々がエリシャに言った。「あなたさまもご覧のとおり、この町は住むのには良いのですが、水が悪く、この土地は流産が多いのです。」すると、エリシャは言った。「新しい皿に塩を盛って、私のところに持って来なさい。」人々は彼のところにそれを持って来た。エリシャは水の源のところに行って、塩をそこに投げ込んで言った。「主はこう仰せられる。『わたしはこの水をいやした。ここからは、もう、死も流産も起こらない。』」こうして、水は良くなり、今日に至っている。エリシャが言ったことばのとおりである。

もちろんこれは、エリシャのことばというよりも主のことばでした。主の呪いがエリコの町の上であり、呪いのしるしは「死」でした。エリコの町はきれいで、景色も良かったのです。けれど、町の人々はそれに満足しませんでした。町には「流産」や「病氣」があったからです。エリコの人々は熱意と勤勉さは持っていましたが、何一つ完全ではなかったのです。流産があり、畑の作物は実を結びませんでした。エリコの人々はあらゆる方法、方策、手段を試みしました。

主の呪いをいかにして取り去るのでしょうか。町の水をどうすれば清くすることができるのでしょうか。これは非常に難しい問題でした。エリコの人々は毎日、毎日この問題で頭を悩ませたのです。

自分について考えてみると、同じことを言わざるを得ないのではないのでしょうか。「自分はダメ。熱くも冷たくもない。イエス様の証し人ではない。たましいを救う者でもない。傲慢が自分に染み込んでいる。自分はいつも自我を通して」と告白せざるを得ないの

ではないでしょうか。いったい自分には望みがあるのでしょうか。

エリコの町の水の状態は、ローマ書7章に書き記されています。ローマ書7章と同じ状態です。パウロでさえ、このような言い表わし得ないほどの絶望的な状態にありました。

ローマ書7章18節から読みましょう。パウロは、救われてから長い間主に仕えた者として、このように告白せざるを得なかったのです。

ローマ人への手紙 7章18節、19節

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。

そして結論は24節です。

24節

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

エリコの町は、主のご目的に対して何も達成できませんでした。同じくローマ書7章も何も目的を達しないことを言っています。あらゆる努力の結果が、ローマ書の、この7章24節です。「私は、何というみじめな人間なのだろう」。

イエス様を救い主として受け入れたなら、永遠のいのちを持っていることになります。けれどもポイントは、いかにしたら、その「新しい生活」を送ることができるのかということことです。

イエス様を知らない人は、「自分の意思」だけで事を行ないます。自分の意思だけを行ないますから、生まれながらの人の霊、たましい、肉体の働きには、統一性があります。けれど、生まれ変わった信じる者の場合、統一性がありません。なぜなら、二つの異なった性質が信じる者のうちにあるからです。信じる者の霊は生きていて、主との交わりを持っています。そしてまた、主のみこころにかなった生活をしようとしみます。けれど信じる者の霊の志すことと、たましいの志すことが違う場合があります。その結果が、ローマ書7章19節です。

ローマ人への手紙 7章19節後半

私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがない…。

ですから多くの人々は、「聖書の教えは良いけれど、実際生活にそぐわない」と言います。もしそうなら、イエス様の十字架の勝利は完全な勝利ではなかったことになります。そして、もしそうなら、イエス様は「新しいいのち」を信じる者に与えるお方ではあるが、信じる者にとっては新しい生活をする力が与えられないということになります。

私たちはイエス様と自分の考えが違うことを知っていながら、自分の考えを優先させる

かもしれません。私たちは、自分の目的と主のご目的は違うと知りながら、自分の目的をなお達成しようと努めるかもしれないのです。私たちも主の前に正しくないことを知っていながら、それを行なってしまうのではないのでしょうか。イエス様は、信じる者をひとりひとり用いようと望んでおられます。

自分も「イエス様のために役に立つ者になりたいけれど、何をやっても実を結べない。どうしよう…」と告白せざるを得ません。

- ・ エリコの水は、どうしたらきれいになるのでしょうか。
- ・ 私たちも、どうしたら新しい生活を送ることができるのでしょうか。
- ・ そして、救われていない周りの人々はどのように導かれるのでしょうか。
- ・ 古い習慣をしっかりとつかんだままの他の宗教を持つ人々は、どうしたら、「生ける唯一のまことの神の子ども」となることができるのでしょうか。
- ・ 若い人々は、どうしたら、無関心から抜け出すことができるのでしょうか。
- ・ どうしたら、あの傲慢な男はまことの信仰に入ることができるのでしょうか。
- ・ また、自分の両親、親戚、友だちは、どうしたら、主のあわれみを経験することができるのでしょうか。

これは何と難しい問題でしょう。

ところでエリコに望みがあるのでしょうか。私たちには望みが残されているのでしょうか。また、家族、友人に望みがあるのでしょうか。これは最後の三番目のポイントです。

* 第三番目。すばらしい逃れ道

前に読みました第二列王記の2章19節に書かれています。すなわち、エリコの人々は、絶望的な状態に直面し、非常に難しい問題の前に立たされ、自分たちではその問題を解決することができなかつたのです。

そこに、エリシャという男がいました。エリコの人々は、この主の預言者であるエリシャから今までいろいろなことを聞いたに違いありません。

すでに学んだことですが、

- ・ エリシャのいのちの根源は、「死の川」ヨルダン川であり、
- ・ エリシャの力は、「よみがえりの力」にあり、
- ・ エリシャの権威は、その「油そそぎ」にあったのです。

エリコの人々は途方にくれ、なすすべを知らずエリシャのところへ行って、自分たちの窮状を訴えました。エリシャは、その窮状からの逃れ道を知っていました。

列王記・第二 2章20節

「新しい皿に塩を盛って、私のところに持って来なさい。」

これがエリコにとってのすばらしい逃れ道でした。「塩」は、腐らないものの代表です。

「塩」はあらゆる腐るものに勝ちます。エリコは、エリシャによって救いがもたらされたのです。「エリシャはよみがえりの預言者」でした。彼の行くところ、どこでも死は逃げ去りました。

新しい皿は新しく生まれた人を意味し、皿に盛っていた塩は新しく生まれた人のうちにある「よみがえりのいのち」を意味しています。エリシャは、新しく生まれ変わって、生けるまことの神との関係を持っていましたので、この新しい皿のようなものでした。この皿の中に塩があったのと同じように、エリシャのうちにも「よみがえりのいのち」がありました。ですからエリシャの行くところはどこでも死が逃げ去ったのです。

私たちの生活におけるすばらしい逃れ道とは、いったいどういうものなのでしょうか。イエス様はすべての自然界をもお造りになりました。しかし人間のわがままによってこの自然界は主の呪いのもとに置かれたのです。これと同じように、エリコは罪のゆえに、聖にして主なる神の呪いのもとに置かれました。

この自然界には望みが残されているのでしょうか。イエス様はこの呪いを取り去るためにこの地上に来られました。「いばら」は呪いのしるしです。イエス様はいばらの冠をかぶせられて死なれたのです。ですからイエス様は呪いの下で死なれたのです。イエス様は、全人類の罪の債務になられたのです。つまりイエス様は私たちのために、「呪いそのもの」となれなければならなかったのです。

ガラテヤ書3章を読んでみましょう。

ガラテヤ人への手紙 3章13節

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」と書いてあるからです。

「木」の代わりに、「十字架」と読んでも良いのです。

希望はどこにあるのでしょうか。「イエス様のよみがえり」にあります。イエス様は、「呪い」のもとに十字架上で死なれ、「よみがえりのいのち」でよみがえられたのです。「イエス様のよみがえり」によって、私たちは霊的な死から解放され、呪いから解放され、実を結ぶようになります。

ガラテヤ人への手紙 2章19節、20節

しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

「私ではなくキリスト」とパウロは経験したのです。

私たちはなぜ、今まで絶望的な状態のうちにいたのでしょうか。なぜ難しい問題の前に

立っていたのでしょうか。だれのせいでしょうか。何のためでしょうか。自分の生活の環境の結果なののでしょうか。または友だち、あるいは親の責任なののでしょうか。それは、だれの責任でもなく、何のためでもなく、「自分自身」の問題なのです。

時々憂鬱になります。喜びがなく、それによって肉体的にも弱ります。病気になってしまう場合もあります。その原因はいったいなぜでしょうか。それはやはり、「自分、自分、自分のこと」を考えるからです。また、ほかの人があなたより優れているために、あなたはそれを見て、自分の喜びを失くしてしまったのかもしれませんが。聖書の教えは良いけれど、実際生活に役に立たないと思うかもしれません。けれど、聖書の教えが何であるかを考えるべきではないでしょうか。

もう一度ローマ書に戻りましょう。

ローマ書人への手紙 6章4節、5節

私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

そして有名な6節です。

6節

私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。

これが聖書の教えです。宗教改革者であるルターは、多くの人々から攻撃を受けました。けれど彼は何ものをも恐れなかったのです。ただ一つ恐れたものがありました。それは「自分の自我。古き人」でした。

私たちの一番大きな妨げは、「私たちの自我」であることは、私たちの経験したところではないでしょうか。私たちは何という強い意志を持っているのでしょうか。自分の頑固な意志を認めた人は、パウロのように、「私は何というみじめな人間なのだろう」と言わざるを得ないでしょう。

私たちはこの望みない状態のうちにとどまり続けなければならないのでしょうか。この難しい問題を解決することはできないのでしょうか。逃れ道はあるのでしょうか。

主のお答えは、「十字架」です。「十字架がただ一つの解放への道」です。イエス様は、十字架で悪魔に打ち勝たれました。イエス様は、私たちの罪の債務を引き受けられました。イエス様は、「十字架」で罪人を贖われたのです。けれど、イエス様はひとりで死なれたのではなく、「全人類とともに死なれた」のです。私たちはイエス様とともに、十字架でもうすでに死んでいるのです。

これは言い尽くせないほどすばらしい逃れ道ではないでしょうか。これを認めるならば、

リバイバルは必ず起こります。あなたは今まで絶望的な状態にあり、「私は、欲している善はしないで、欲していない悪はこれを行なっている」と叫んでいたでしょう。今は、その逃れ道を知っているはずです。このローマ書6章4節から6節です。もしこのすばらしい事実を自分のものにするならば、私たちはパウロと同じように、主を賛美することができるはずです。

ローマ人への手紙 8章1節、2節

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

イエス様とともに死んだということは、もはや自分が存在しないことを意味します。あなたがもう死んでしまっているならば、興奮することも、自分の意志を働かせることも、また怒ることも焦ることもできないはずです。

あなたは今もなお、立派なキリスト者になりたい、聖書を読む祈る人になりたい、柔和と忍耐を身につけたい、と思われるでしょうか。主は語っておられます。「おまえは何も持っていない。おまえはただ汚く、ボロボロで、罪だらけだ。おまえは何もできない。おまえのすることは、わたしにとって全部大嫌いなものばかりだ」と。

したがって私たちに対する主の判決は「死」であり、その結果、私たちは主イエス様とともに十字架につけられて死んでしまったのです。「私は、イエス様とともに十字架で死んだ」。それを今日新しく認めようではありませんか。

あなたはイエス様とともに十字架につけられたのですから、あなたの支配者は自分ではなく、「御霊なる主」であるはずです。あなたの古き人は、十字架で取り去られました。「御霊」は、あなたに「イエス様のよみがえりのいのち」を与えたのです。

ローマ人への手紙 6章5節

もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。

とあります。

「よみがえりのいのち」は、すばらしい逃れ道です。「イエス様のよみがえりのいのち」は、私たちの敗北に打ち勝ちます。自分の古き人と罪は十字架で死に、新しく生まれ変わった人は「聖霊の支配」のもとにあるということを信じ続けるのが、主に属する者の生活です。

私たちは、

- ・キリスト者であるにも関わらず、新しい生活をする力を持っていません。
- ・聖書を読み、祈る力がありません。
- ・イエス様の証し人として立つことはできません。
- ・聖書の教えを生活に実現することができません。

私たちそのものがこれらの力を持っていないので、イエス様は、「聖霊」によって私たちの心の中に「よみがえりのいのち」を注ぎ込もうとっておられるのです。

例えば、一匹のハエは日本からドイツまで飛んで行くことはできません。それと同じように、私たちはイエス様なしで新しい生活をすることはできません。けれど、そのハエが飛行機の中に飛び込めば、十何時間でドイツへ行くことができます。同じように私たちが「聖霊の支配のもと」にいるならば、簡単に新しい生活を送ることができるのです。これは、「感情」の問題ではありません。「意志」の問題です。

私たちは今まで、「聖霊」を牢獄の中に閉じ込め、自分で考え、志し、自分を支配者の地位に置いて来ました。そういう場合に、自分は主イエス様に服従したいと思うかもしれませんが、しかし結果として、聖霊は牢獄から出て、客間に移されたことにはなりますが、それで十分ではありません。これは「肉にあるキリスト者」の生活です。なぜなら、客は決して家の主人になり得ませんから。これは悩みの生活です。

「聖霊」は完全な支配を望んでおられます。今日、新たに「聖霊」に自分の支配権をゆだねようではないでしょうか。もし、御霊が生活の支配者となるならば、自分の罪深さを知り、また、よりよくイエス様を知りたいと思うでしょう。そして『聖霊の実』は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、誠実、柔和、自制です」。

あらゆる問題の解決とは、いったい何でしょうか。逃れ道は何でしょう。イエス様の答えは、「十字架」です。

イエス様が死なれた時、私たちもともに死んだのであり、またイエス様がよみがえられた時、私たちもともによみがえらせられたのです。この事実を、主は、聖書の中で私たちに語っておられます。主は嘘を知らないお方ですからこれは事実です。この事実を信じ、感謝しましょう。結果として、私たちを取り巻く人々の中に、リバイバルの奇蹟が起こります。

今日、自分の頑固な意志をイエス様に明け渡し、イエス様が「聖霊」によって自分の生活の支配者になられたことを計算に入れるなら、リバイバルを経験します。自分の古き人、頑固な意志、傲慢が、イエス様とともに十字架で死に、新しく生まれ変わった人は聖霊の支配のもとにある、ということ信じ続けるのがリバイバルの秘訣です。

リバイバルとは何でしょうか。リバイバルとは、「イエス様」なのです。リバイバルの秘訣は「イエス様とともに歩む」ことです。

聖書の中でもっとも大切な節は、ヨハネ第一の手紙1章7節ではないかと思えます。

ヨハネの手紙・第一 1章7節

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

リバイバルの秘訣、必要条件は、私たちが「光のうちにいる」ことであり、罪を言い表

わすことです。どうでしょうか。自分の生活の中に隠されている罪があるのでしょうか。今日イエス様に、「お赦しになってください」と言おうではありませんか。

イエス様はお赦しになるのでしょうか。イエス様は大喜びであらゆる罪をお赦しになります。イエス様は、十字架で私たちの債務を贖われたからです。イエス様は私たちの罪の債務を担われたからです。ですから、絶望する必要はありません。自分の罪、わがままを告白するならば、私たちがそれを感じようが感じまいが、イエス様は即その罪をお赦しになりますから、感謝すべきです。

「あなたの信じたとおりになるように」と、今日も主は語っておられるからです。もし、「イエス様、どうか罪をお示しになってください」と祈るならば、イエス様はすぐに罪を教えてください。それは、イエス様は私たちのような者を用いようと望んでおられるからです。私たちを通して、イエス様はご自分のご栄光を現わされたいからです。

もし私たちが、「イエス様、どうかあなたに信頼できる恵みを与えてください」と祈るならば、必ずイエス様はその願いをすぐに聞き届けてくださいます。そして私たちはその恵みを感謝し、前進することができます。「あなたの信じるとおりになるように」とイエス様は言われます。

ペテロは、当時イエス様の御名のゆえに迫害された主を信じる者に、励ましのことばとして次のように書いたのです。

ペテロの手紙・第一 4章14節

もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくくださるからです。

「栄光の御霊が、あなたがたの上にとどまっている」と書かれていますが、「栄光の霊を与えてください」と祈る必要はありません。自分の感情は大切ではありません。パウロは、内にイエス様を宿し、主の権威を持っていました。しかしそのパウロも時々怯え、弱さを感じました。主の与える権威とは強さや力を意味しているわけではありません。自分は脇役としてイエス様の後ろに立ち、イエス様ご自身に語っていただくなら、イエス様の栄光が現わされます。

私たちはどのようにして、謙遜、喜び、勝利、よみがえりの力を自分のものにすることができるのでしょうか。

- ・自分がイエス様とともに十字架につけられ、死んだことを感謝しなさい。
- ・自分はイエス様のよみがえりにより新しく生まれ変わり、よみがえらされたことを感謝しなさい。
- ・御霊は、あなたがイエス様のよみがえりの力で生活する力です。これを感謝しなさい。

エリシャはエリコの救いのために用いられた道具でした。エリシャは新しい皿であり、その中には塩、すなわち「よみがえりの力」がありました。

どのようにしてエリシャはこの働きに備えたのでしょうか。主の用いられたこの器は、

いかにして生まれたのでしょうか。エリシャは、ヨルダン川を渡らなければなりません。私たちはイエス様とともに十字架につけられ、ともによみがえらされました。

エリシャは油そそぎにより権威を授けられました。エリシャは自己に死に、死の川を渡り、よみがえらされ、上からの油そそぎを受け、これらを信じ続けました。これが、エリシャの生活でした。エリシャはこの信仰をもって前進し、その結果、「解放とリバイバル」に達したのです。

エリシャと同じように、私たちが、「自分は主イエス様とともに十字架で死に、かつ、ともによみがえり、主の霊が自分の生活の上にとどまっている」ということを信じ続けるならば、「地の塩」となることができます。

私たちは、エリシャと同じように、「よみがえりの器」でしょうか。私たちを取り囲む救われていない人々は、逃れ道を見い出すことができず、私たちのところに寄って来ます。私たちからはよみがえりの力がほとぼしり出るでしょうか。

イエス様は弟子たちに、「あなたがたは地の塩である」と言われました。私たちは自分の家族の塩となっているのでしょうか。

生まれながらの人は古い皿です。生まれながらの人は、「死の川」ヨルダン川を少しも知りません。生まれながらの人は、イエス様の「よみがえりの力」を知りませんし、「聖霊の油そそぎ」も全く分かっていません。新しい皿だけが、救いと解放をもたらします。

けれど、たとえ新しい皿であっても、その中に塩が無ければ何の役にも立ちません。しかし、あなたが「イエス様のよみがえりのいのち」をもって生活するならば、周りに住む霊的に死んでいる人々を救いに導き、すばらしい逃れ道を与えることができるはずです。

私たちも間違いなくリバイバルを必要とします。すなわち、私たちには「主イエス様が必要」なのです。イエス様をよりよく知らなければなりません。救われていない周りの人々にとっては、よみがえりのいのちを持つ人の中に「イエス様」が見い出されなければなりません。

イエス様は、ご自身の栄光を現わすために、人間を必要とされます。イエス様の願いは、イエス様ご自身についてだけを語り、役割を演ずることをせず、「自分のためには何も望まない」と思う人々を求めておられるのではないのでしょうか。

かつて、主は言われました。「わたしはだれを遣わそう。だれがわたしのために行くだろうか」と。

信仰によって、自分がイエス様とともに十字架で死に、イエス様とともによみがえり、御霊によって前進することを感謝する者は、イエス様がリバイバルを起こす道具として用いられるに違いありません。

了